

WORKS

Empower&Energize

No140
2017/05

名東福祉会は名古屋市と日進市を中心に
知的障害者を中心とする福祉活動を行っています

「WORKS」特別インタビュー

アートを支援する

～障害のある人のアート支援～

今回の「WORKS」は、特別企画として、長年名東福祉会の陶芸活動に携わっていた三上政美さんのインタビューをお送りします。近年、障害のあるひとたちによる芸術活動に注目が集まり、「アール・ブリュット」「ボータレス・アート」といった言葉が様々なところで聞かれるようになりました。一方、名東福祉会では、メイトウ・ワークス、天白ワークスの二カ所で、開設のころから陶芸活動が実施されており、2011年まで開催されていた「フロール展」に出展していたこと



は「記憶のみなさんも多いかと思えます。こうした流れをリンクさせ、「アートな日中活動」を法人内で展開させ始めた三上さん。まずご自身の芸術との関わりからおうかがいしました。

■一度ドロップアウトしなければいけない、と思い込んで(笑)

「絵は小さいころから好きで、高校生のころから油絵を描きだして。勉強が嫌



「いだった、という面もありますが（笑）。どこか美大に行かないといけないけど、ということ、受験準備をしている中で、ある人から、「君みたいな大雑把な人は、絵画より彫刻や陶芸のほうが合うんじゃないか？」とぼそつと言われたのがきっかけで（笑）、立体造形に移っていきました。」

「美大を出てからは、テレビのセットのデザインとか、舞台美術とか、そういうものを制作する会社に勤めていました。5年ほどのことでしたが。その後……当時はヒッピーの時代だったの

で、アートを目指している人間はどんな影響を受けて、そこで一度ドロップアウトしなければいけない、と思いついて（笑）、インドへ放浪の旅に出ました。」

「インドから戻ってきて、生活をしていかなきゃいけない、陶芸だったら食べるに困らないだろう、と考えて、瀬戸窯業高校の専攻科に入りました。そこで陶壁と出会って、「大和窯業」というところに勤めることになりました。5年ほど働いて、独立することになりました。」

■イメージしていた

「人の営み」と一致していた

ダイナミックな時代をダイナミックに泳いでこられたエピソードでした。では、陶芸で生計を立て始めた三上青年が、障害のあるひとたちと関わる様になっただけは何だったのでしょうか。

「独立したのが、時代的にバブル後期で、世の中が冷え込んできていたので、なかなか注文がこない。そんなときに、「ふたば作業所」から声をかけていただきたい……以前陶芸を担当していた職員が辞めてしまっただけで、品物が窯に入ったままになっていて（笑）、それを焼いてほしい、というのが最初でした。」

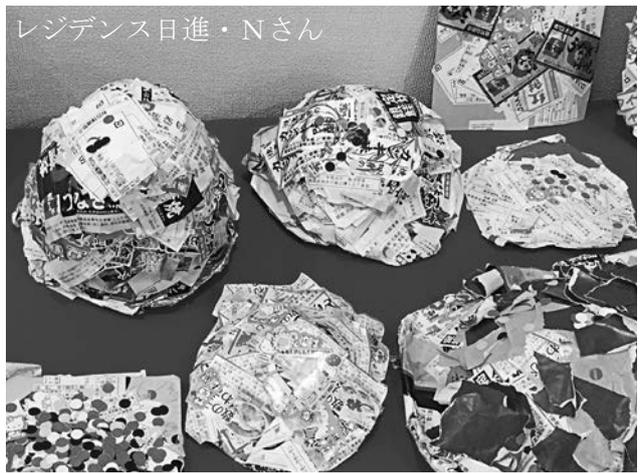
「基本的には、窯場で陶芸をやっていることが多かったんですが、現場を見ていると何か面白そうだったので、現場での支援にも携わる様になりました。障害のある方の感覚というか振る舞い……自由で、朗らかで、ある意味勝手気ままで（笑）、そういう姿が、自分のイメージしている「人の営み」という



メイトウ・ワークス・Mさん

ものと一致していたので、すんなり溶け込んでいきましたね。」

「ふたば作業所」は、瀬戸市にある就労継続支援B型・生活介護事業所です（旧・知的障害者授産施設）。県内で、活動内容として陶芸を初めて取り入れた作業所とされています。「ふたば作業所」での職員経験が、やがて名東福祉会との縁を結んだようです。



レジデンス日進・Nさん

「当時、あさみどりの会の施設（さわらび園）で講演会があつて、そこで僕が、「ふたば作業所」の現場の職員として実践報告をするんですが、そこに加藤久和さん（前理事長）も名東福祉会の報告をするということで参加されていたのが、法人との最初の接点ですね。僕が27歳でしたから、あの方はもともと若かったんじゃないかな。」

「長い間「ふたば作業所」にお世話になっていましたが、並行してやっていた陶壁の仕事が忙しくなって、いったん退職することにしました。それから2年

ほどで、バブルが完全に弾けて、仕事も来なくなってしまい……家で過ごしていたら、久和さんからお声がかかって、天白ワークスに来た、というような経緯です。陶芸をやる人が天白ワークスにいなくなっちゃった、ということとで。」

「ですので、「プロの福祉の現場の職員」という感覚があまりなくて、周りの職員には理解されず、迷惑をかけてきたと思います（笑）。一方で、職員のみなさんは、現場をやりながらの陶芸、ということとで、どうやっていいかわからなくてごちゃごちゃになっていたんで、いろいろと手を出したり改善したり、というのは最初から携わっています。陶芸の技術があるので、ここまで置いてもらえたのかな、と。」

■陶芸と言えば、価値が生まれる

三上さんがずっと携わってこられた陶芸の活動が、名東福祉会でも根を下ろし、現在に至るまで行われています。ただ、陶芸活動の現場で作られているものの多くは、箸置きやお皿など、販売するためのもので、芸術作品とは少

し違う気がします。三上さんの中では、こういったものは区別されているのでしょうか。

「陶壁はアートなのか……陶壁や陶芸作品というのはまず、商品でしょうか。不特定多数の人が価値を認めるようなものを作り、それが売れてお金になる、というのはやはり商品ではないかと。」

「二方でアートというものは、誰かの「表現」として存在することが先決で、それが売れるのかどうかは、第三者、たとえば画商などが価値を認めるかどうか。」

かによります。また、基本的には量産品ではない、手作りのものです。」

「天白ワークスの利用者さんのKさん、という方が作っているのは何か、というと、商品ではなくアート、芸術作品です。素材として粘土を使っているだけで、もし違うもの……例えばガラスや金属を使っても、きつと同じようなものが生まれると思います。ですから、「陶芸」という呼び方ではなく、「土の作品」とか「土の造形」とか、そういった呼び方がふさわしいのかもしれない。」



天白ワークス・Kさん

「ただ、お茶碗、瀬戸物、焼き物ではなく「陶芸」「陶芸作品」と呼ぶことで、ある種の価値を生んでいる部分はありません。」

なるほど、確かに「お茶碗」や「瀬戸物」と言われると、日常的に使う、何となく素朴な商品がイメージされます。一方で、素材に注目すると「土の作品」ということになり、これはこれで様々なアプローチがあって、うまくイメージが作れません。これらをまとめて「陶芸」と言うことで、鑑賞する側には明

確な共通イメージが生まれてきます。

「付け加えると、アール・ブリュットにおける土の造形というのは、日本独特です。海外のアール・ブリュット作品を見ても、陶芸によるものはものすごく少ない。平面の作品が圧倒的に多く、立体でもプリミティブな仮面などはありますが、土の造形は日本発の素材といってもいいんじゃないでしょうか。」



はまなす・Fさん

アール・ブリュット (Art Brut)

フランス語で「生の芸術」のこと。フランスの画家ジャン・デュビュッフェが提唱した概念。

デュビュッフェは精神障害者の作品に衝撃を受けて、「純粹なもの」という意味でこの言葉を作ったとされる。

その後、精神障害者のものに限らず、既存の枠組みに収まらない芸術作品を包摂してアール・ブリュットと呼ばれるようになる。

スイス・ローザンヌには、デュビュッフェが蒐集した作品を中心として収蔵・展示している、「アール・ブリュット・コレクション」という美術館がある。

■アール・ブリュットの価値

「アール・ブリュット」に関しては別枠のコラムを参考にさせていただいて、今注目されている「アール・ブリュット」は、芸術的にどんな位置を占め、どんな価値を示しているのでしょうか。

「アール・ブリュットがなぜ価値を生むのか……こういった作品を作る人は、芸術についての既存概念がないので、「え、こんなものがあったもいいの？」「今まで見たことないよね」「これきれ

いだよね」「いいね」と誰かが言い出すんです。一般の人が「いいね！」ということもあるんですけど、やはりアーティストや評論家といった人が衝撃を受けるんですね。芸術の専門家の既存概念に問いかける、もしくは新しい概念を形に見せてくれる……そんな価値もアール・ブリュットにはあると思います。」

「現在、日本のアール・ブリュット、障害者アートをリードしているのは滋賀県ではないかな、と思います。元々、糸賀一雄さんが始めた「近江学園」があり、そこに八木一夫という、陶芸をやっている人には神様のような人が指

導に行ったりして、その流れがあるのか、アメリテイ・フォーラムでの展開があったり、ボードレスアートNOMAという活動があったり、県内での盛り上がりが見られます。」



■「やらせてあげて」

と言っているのが僕の役割

滋賀県の盛り上がり比べると、愛知県はどうなのか……ということも気になります。そもそも名東福祉会での取り組みについてうかがおうと思います。長年にわたって行われてきた陶芸作業と、三上さんが進めようとしているアートな活動はどう異なるのか。また、「アートを支援する」というのは、どういうことなのか、お話しいただきました。

「メイトウ・ワークスの場合、Nさんはすでに作品に近いものがたくさんありましたので、中心はMさん一人の創作活動に対してどのようにアプローチするか、ということ。アート支援というのは、その人が日常的にやっていることを、作品として提示するにはどうしたらいいか、という提案をすることだと思っています。Nさんの場合は、セロテープを巻いて作品に近いものを作っている、Mさんの場合は粘土の型おこしをやる、それを僕はいろいろとは思わないんですよ。」



メイトウ・ワークス・Nさん

「レジデンス日進は、週1回金曜日にかがっています。Nさんが面白いことをやっていますね、シールをたくさん貼るんです。昔から彼女を知っている職員は、シールが好きなことも、シールを貼るのが好きなことも知っているんですが、それがアートにつながるかもしれない、とはなかなか思い至れないのではないのでしょうか。」

「はまなすでは週に2回、創作活動を行なっています。月曜日と木曜日の午後ですね。木曜日の午後は絵画にしたんですけれども、机の上に布を広げて、

そこに好きなように描いてもらって。部屋が絵の具だらけになってきて(笑)。やっぱり職員さんは、「これしちやだめ」「あれしちやだめ」という形になっていきますよね。それを「やらせてあげて」と言うのが僕の役割だと思っています。」

「本人が日常的にこだわっていることは、作品に結びつきやすいと思います。普段やっていることについて、「本当はこういう風にしたかったんじゃないか」と推測しながら、どうしたら作品らしく組み立てられるか、ということをサポート

する。それがアート支援の一つの視点ですが、通常の生活支援でも同様の視点が隠れているのではないかと、思います。ご本人が「何をしたいのか」を受け取って、その方向に向かって、そうやっていくようにお手伝いする、という部分では、アート支援も生活支援も同じです。」

「ただ、生活支援だと、社会との関わりの中でどうしてもやってほしくないこと、止めざるを得ないこと、が出てきます。一方でアート支援の場合は、作品の制作過程に他者が介入して制止する、ということは基本的にはありません。アート支援を行なうことで、「やってもいい」場面が増えるのであれば、それを手がかりにして、ご本人たちにもう一步、踏み込んでいけるのではないのでしょうか。」

「ご本人が「何をしたいのか」を受け取る」ことは、アート支援も生活支援も同じ、というお話は、「ストレングス・モデル」(その人の持つ強みに着目して、それを活用していくこうとする方法)や、「意思決定支援」にもつながる重要なものだと思います。日常的な支援の中では忘れがちなことを、少し非日常的なア

ト支援という場を通して、意識しなおすことができるのかもしれないですね。

最後に、これからの法人での活動についておうかがいして、インタビューを終わりたいと思います。

「愛知県でも、北区の事業所などが芸術分野で独自の動きをしています。まだまだ低調といったところですが、歴史的なことを考えても、名東福祉会が引張っていかなければいけないのではないか、と思います。僕の参加している、別のNPO法人で展覧会を開催するときには、法人の利用者さんの作品をお預かりしたりしていますが、法人主体で展開しているわけではないです。」

「今後は、法人内で陶芸準備委員会というのを立ち上げたいと思っています。各事業所で創作活動を行なっていますが、アート支援として関わる、ということがなかなかできていない部分があると思いますので、その辺りを掘り下げて伝えていけるようにしたい。それから、法人の企画する展覧会をやっていかなければいけない、と思っています。」

ありがとうございました。

本当は、1時間30分以上にわたり、大いに話していただいたのですが、誌面の都合と諸々の事情(?)により、かなり編集をしています。興味を持たれたかたは、是非三上さんと直接お話しただきたいと思います。芸術と人生について、ディープなお話が聞けますので。

滋賀県と 障害者のアート活動

障害者福祉にとって滋賀県といえば、「近江学園」の存在が大きい。昭和21年創設、糸賀一雄が園長を務めた、元々は戦災孤児等児童の保護施設で、現在は県立の知的障害児施設となっている。昭和29年、新進の陶芸家で、後に前衛陶芸・オブジェ陶芸の先駆となった八木一夫が、ボランティアとして陶芸指導を行なったことから、現在でも生産教育の中に窯業が取り入れられている。

「近江学園」創設者の一人である池田太郎が、学園を卒業する青年たちを連れて訪れたのが「信楽青年寮」。職業訓練の場として窯業を主に行なう授産場を開設、また実際に地域の工場に勤めに出るなど、地場産業の「信楽焼」を生かした活動が行われている。

こうした土壌があるからか、滋賀県は障害者のアート活動に関して先進的な地域となり、2004年には、障害者のアート作品の常設展示施設として「ボーダレス・アートミュージアムNO-MA」が設立され、また毎年2月に大津で行なわれる「アメニティフォーラム」の作品展にも、県内の多くの事業所から作品が寄せられるという。さらに障害者のアート活動・アート支援に先鋭化した「やまなみ工房」という事業所が登場するなど、その動向は注目されている。



はまなすの活動風景

編集後記

今回は、当法人の陶芸事業部担当である三上さんにご登場いただき、障害のある方々の「アート支援」について語っていただきました。

私自身、障害者支援に携わって25年以上（！）となりますが、「アート支援」と表現される取り組みの自由さや奥深さにすっかり魅了された気がします。^「やらせてあげて」と言うのが僕の役割<とまで言われると、「参りました」と頭を素直に下げる他ありませんね（苦笑）。

本人主体とか、意思決定支援とか、様々な言葉を通して、我々支援者は本人に寄り添う術を考えるのですが、可能な限りの制約を取り払って本人の想いを引き出すことが「アート支援」だとすると、それはまさに「リアフリー」に通じるではないかと、今更ながら思い至ります。

この「WORKS」の紙面も、今回は大胆に（？）写真も多用して雰囲気が変わりました。賛否の方もうかがいながら、新鮮な切り口、新鮮な見せ方を心がけていきたいと思えます。

【小】

三上政美：1949年生まれ。和光大学人文学部芸術学科（彫刻専攻）卒業。名東福祉会陶芸事業部担当。瀬戸造形団員。NPO法人「ART SET 0」理事。



ご寄付ありがとうございます

平成 28 年 10 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

◆メイトウ・ワークス

安江 博雄 様 尾崎 城二 様 近藤 正俊 様 宇佐美ゆみこ様

◆天白ワークス

水谷 義孝 様 武田 信夫 様 北原 政子 様

◆レジデンス日進・上ノ山ホーム

伊藤 和幸 様 河津 光子 様 中埜 章代 様 尾崎 城二 様
井口 和義 様 伊藤 時義 様 大村 茂夫 様 近藤 正俊 様
吉田 征一 様 高橋 元彦 様 北原 政子 様 宇佐美ゆみこ様
レジデンス日進家族会 様

名東福祉会のホームページ

ホームページアドレス <http://www.meito.or.jp>

●社会福祉法人 名東福祉会

〒 470-0124 日進市浅田町上納 58-4
TEL 052(805)1003 FAX 052(805)1004

●メイトウ・ワークス（就労継続B型・生活介護）

〒 465-0055 名古屋市名東区勢子坊 2-1303
TEL 052(702)2864 FAX 052(701)2079

●名東区障害者基幹相談支援センターきふね （相談支援）

〒 465-0055 名古屋市名東区勢子坊 2-1303
TEL 052(702)2863 FAX 052(701)2079

●天白ワークス（就労継続B型・生活介護）

〒 468-0023 名古屋市天白区御前場町 327
TEL 052(804)5487 FAX 052(804)5416

●デイケア はまなす（生活介護・相談支援）

〒 465-0054 名古屋市名東区高針台 1-911
TEL 052(704)7551 FAX 052(704)7552

●レジデンス日進

（施設入所支援・就労継続B型・生活介護）
〒 470-0124 日進市浅田町上納 58-4
TEL 052(805)1003 FAX 052(805)1004

●上ノ山ホーム（グループホーム）